

日本人教員とネイティブ教員による フランス語ペア授業の試み

三 上 純 子

ベアトリス・ルロワイエ

1. はじめに

昨年度、金沢大学の選択必修科目である初級フランス語において、週2コマのクラスを、日本人とネイティブの教員がペアを組んで運営するという試みを行った。本稿は、その実践報告である。反省点の多いこの試みをあえて報告するのは、本学の未習言語教育について議論する際の材料とはなりうると考えるからである。以下、ペア授業を試みた理由、教科書選択、ペア授業の実践報告、ペア授業と教科書についての教員の評価、という順序で報告を進めてゆく^[1]。

2. ペア授業を試みた理由

ペア授業を試みた第一の理由は、本学の履修システムに関連している。本学の未習言語（いわゆる第二外国語）の履修システムでは、学生は週1コマのA1/A3クラス（フランス語では文法）と週1コマのA2/A4クラス（フランス語では講読または会話）を自由に組み合わせて履修することができる。このシステムでは、学生の時間割上の自由度は高いが、週2回の授業内容に連動性がないため、学習効果の面から見ると効率に疑問がある。そこで、文法と会話が歩調をそろえて進む実験的な授業に取り組んでみたいと思ったのである。

第二の理由は、ネイティブ教員の抱えるクラス運営上の困難である。現在フランス語では外国人教師1名と非常勤講師2名の計3名のネイティブ教員に初級会話の授業を担当してもらっているが、彼女らの日本語力は学生と意志疎通できるレベルには達していない。フランス語による直接法の授業は、学生にとって、フランス語圏での現実のコミュニケーションを体験できるという意味で大変有意義である。ただ反面、初級レベルでは、ネイティブ教員と学生との間の意志疎通が難しい場合もあるのは否めない。特に、勉強不足の学生にどのように注意を与えるかは、フランス語と日本語のコミュニケーションにまつわる文化的な違いもあって、かなりデリケートな問題である。ペア授業を行うことによって、日本人教員は、このような場面でネイティブ教員を支援できる可能性があるのではないかと考えた。

3. 教科書選択

ペア授業で使う教科書としては、文法、言行為、練習問題などを過不足なく備えた総合教科書が望ましいというのが筆者たちの意見であった。さらに、日本語の読解力が十分でないネイティブ教員が使えるためには、文法説明や練習問題の指示などがフランス語で行われている教材である必要がある。

その場合、一つの選択肢は、一般の学習者を対象としてフランスで製作された語学教科書であろう。ネイティブ教員が単独で担当しているクラスでは、この種の教科書を使用している^[2]。ただし、この種の教科書は、従来英米系の学習者を念頭において作られることが多く、進度も早い。一部の日本語による補助教材のついたものを除いて、当然のことながら、日本語の説明はない。本学のシステムでは、ペア授業も、学力、関心などに差のある、全学部の学生が履修することができるわけで、一方の授業を日本人教員が担当するとはいえ、この種の教科書を2コマ通して使った場合、習熟度の低い学生がついてこられるかどうか不安が残った。また、2年次で中級の授業であるフランス語Bに接続するためには、他の文法クラスで扱う初級文法事項を学習しておかねばな

らないが、練習問題の充実したフランス製の教科書を使うと、かなりの速度で進んでも、この条件を満たすことは難しいように思われた。

では、日本で大学生用に作られた教科書はというと、まず、総合教科書という形式のものがきわめて少ない。これは現在でも、多くの大学で、文法と講読ないし会話という区分で授業が行われているためであろう。総合という体裁をとっている場合も、練習問題などの分量は不足していることが多い。さらに、フランス語による教授用資料、練習問題の指示などがついている教科書の数は限られているのが現状である。

このような状況の中で検討を重ねた結果、最終的に『ディアローク』（大阪日仏センター編、第三書房、2800円）を選んだ。主な選択理由としては、1) コミュニケーション行為を中心においた教科書である、2) 聞き取りを重視しており、学習者用のCDがついている、3) 日、仏混成のスタッフにより編集されていて、教授用資料や練習問題の指示が日、仏両言語で行われている、4) 文法を中心としたワークブック（1000円）がついているので、教員が仕事を分担するときに便利である、などが挙げられる。

4. ペア授業の実践報告

1) クラスの構成

前期の履修者の総数は33名。内訳は、1年生30名（文学部3、法学部8、教育学部6、理学部2、工学部11）（なお工学部11名中には、インドネシア人の留学生1名が含まれる。）、2年生2名（法学部1、工学部1）、4年生1名（文学部）であった。後期は工学部の2年生が、学部の授業の関係で履修できなかったが、それ以外は同じメンバーであった。1回目の授業の前に優先受講^[3]を申し込んだ学生は、文法クラスでは10名ほどであったが、ペア授業の会話・文法の双方のクラスに申し込んである場合にのみ優先受講を認めたので最終的にその数は多くはなかった。しかし、抽選をすることなく、希望者全員が履修できた。学部による内訳については、工学部の学生が全体の三分の一以

上を占めたことを指摘しておきたい。ここ数年のネイティブ教員単独の授業では見られなかった現象であった。

2) 授業、試験の分担

授業の進め方については、文法クラスと会話クラスに分けて単位認定する本学のシステムを尊重し、三上が文法クラス、ルロワイエが会話クラスを担当することにした。三上が主にワークブックを使い、教科書を使って授業するルロワイエに先行して進むというスタイルをとった。授業は火曜3限が文法、木曜3限が会話だったが、幸い前・後期を通じて、火、木のリズムで授業することができた。互いの授業内容については口頭かメールで連絡しあった。

試験も授業と並行する形で分担した。三上は前・後期とも文法中心の筆記試験を行った。ルロワイエは前期は言行為（自己紹介など）の筆記試験と発音及び易しいテキストの聞き取り試験、後期は口頭試験（自己紹介、家族紹介、易しいテキストを読み、内容についての質問に答えるというもの）だけを行った。

3) 授業例

前期は、授業内容に高い連動性を保つ形でペア授業を進めることができた。文法クラスでは、会話の授業がスムーズに行われるように、新しい文法事項や表現の準備的な導入を心がけた。そして、ゲームや単純な応答練習、筆記練習を通じて、学習事項の定着をめざした。例えば教科書第3課では、自己紹介をする、買い物をするといった場面で、年齢や値段の口頭表現・聞き取りが必要となるが、文法クラスでは、補助プリント等を使い、数字を早めに覚えていった。また、自己紹介でも重要な、名詞・形容詞の性と数の変化も会話クラスの前に学習し、ゲーム形式の練習で発音にも慣れるようにした。

会話クラスでは、役割分担によって、発音や聞き取りに多くの時間をかけることができた。前期には、第7課までの言行為の学習に加えて、母音、子音の発音・聞き取り練習にも力を注いだ。

後期も、文法はほぼワークブックにでてくる順序で進むことができた。しかし、教科書の言行為の方はワークブックの文法事項と必ずしも並行しておらず、

語彙、表現も急速に増加したため、習熟度の低い学生に学ばせるのは難しくなった。そこで、後期後半の会話クラスでは、教科書を離れて、それまでの学習事項を使いこなすことに主眼をおいた復習中心の読解練習、聞き取り練習を行うスタイルに切り換えた。ペア授業の連動性は前期より低くなった。例えば、文法クラスでは、11月28日に代名動詞、12月5日に直説法複合過去形を学んだが、12月7日の会話クラスの内容は、時刻の言い方の復習、一日の行動を代名動詞も含んだ動詞の現在形を用いて語ったテキストの聞き取り、及びこのテキストを応用して、一日の行動を説明する練習であった。ただし、緩やかな形では二クラスの連動性は保たれた。会話クラスでは、最終的に、文法で学んだ複合過去形と半過去形を使って、週末やバカンスの体験を語るという練習まで進んだ。

4) ペア授業に対する学生の評価

次に、前・後期の最終授業で行ったアンケートをもとに、ペア授業に対する学生の評価を見てみたい。前期と後期では質問の形式を変えたため、やや答え方が異なるが、「日本人教員と文法を学び、ネイティブ教員と会話を学ぶシステム」については、総じて肯定的であった。前期は、「とてもよい」「よい」と答えた学生が75%以上で、主な感想には以下のようなものがあった。

- ・進度があるので、統一感があって学びやすい。(5名)
- ・バランスがとれていいと思った。発音はネイティブと学ぶのがベストだと思うし、文法は日本人に学ぶのが分かりやすい。(4名)
- ・内容が並行しているので、学びやすかった。(3名)
- ・ネイティブの先生の授業でわからなかったところを日本人の先生に聞けたからよかった。(1名)

後期も、「とてもよい」「よい」と答えた学生が72%であったが、20%の学生は「あまり効果的ではなかった」と答えている。感想にも不満が読みとれる。

- ・二つの授業は時々、かみ合っていないときもあったと思う。(1名)
- ・教科書がわかりにくかった。(1名)
- ・後期も授業内容が連動している方がわかりやすかったと思う。(1名)

なお、前・後期を通じて、一部の学生からは、ほとんどフランス語だけで行

われるネイティブ教員の授業について、「もう少し日本語や、英語を使ってほしかった」という意見が散見された。この点は、ネイティブ教員が単独で担当している授業とあまり変わらない反応であった。

5) 学生の到達度

文法・会話クラスとも、前期については問題のない結果であった。後期については、成績の両極化が顕著に見られた。クラスの半数以上の学生の到達度は満足できるものであったが、文法クラスの数名の答案に理解不足、勉強不足が目立った。復習中心の口頭試験を行った会話クラスでは、わずかではあったが、コミュニケーションを拒絶する姿勢を示した学生もいた。両極化の理由としては、クラスの学部構成の影響が考えられる。一方に、法学部を中心にして、モチベーションの高い学習者のグループが形成された反面、英語を苦手とする傾向の強い工学部の学生^[4]の人数も多かった。成績は、このグループ構成に対応していた。

ペア授業クラスと単独担当クラスとの全体的な到達度については、履修者の学部構成や教材が違うので厳密には比較できないが、文法・会話ともあまり大きな差は見られなかった。各自のモチベーション、学習量などが学生個人の到達度を左右する要因としていかに大きいかを確認させられる結果であった。

5. ペア授業、教科書に対する教員の評価

1) ペア授業に対する評価

互いの授業の内容を連絡しあい、ほぼ並行して進んだペア授業が、相互補完的な意味で有効に機能したことは、日・仏の教員が共通して認めた利点である。会話クラスでは、文法の学習内容に応じて、学生のモチベーションを高めるような口頭練習、聞き取り練習を準備することが可能であった。文法の学習が進むにつれて、ルロワイエは、継続的に勉強する学生が、フランス語会話により興味を示し、モチベーションも高くなったことに気づいた。文法クラスでは、

ルロワイエが説明に苦勞した表現などについて説明を補足できた。

また学生との意志疎通についても、ペア授業クラスは効果的であった。直接法により授業を行うネイティブ教員のクラスでは、モチベーションの低い学生、習熟度の低い学生は教室で孤立しがちであるが、問題のある学生に三上の方から注意した結果、授業態度に変化が見られた場合もあった。個々の学生の反応についても情報交換したので、三上の方でも総合的に学生の力を把握できた上、名前も早く覚えられた。

文法と会話の役割分担のメリットとしては、会話クラスでは、すでに述べたように、発音や聞き取りに多くの時間をかけられた点が挙げられる。毎回授業の始めに、発音練習やテキストを読む練習、自己紹介や友達の紹介などの簡単な口頭練習を繰り返すのは、ネイティブのフランス語にふれる機会の少ない学生たちにとって有効だと思われた。

他方で、文法クラスで学生の準備ができすぎていると、会話クラスでは、学生が受動的になる場合もあった。特に学ぶ事項が限られている前期には、単独で担当しているクラスにくらべて、学生の集中力が低くなるという傾向が見られた。

また会話クラスでは、口頭練習やロールプレイに重点をおいたが、人数の多かった工学部の学生の中に初めからグループが存在していたせいもあり、対話のパートナーが固定化していた。これはペア授業に限らないが、会話練習を十分行える環境を整えるには、クラス全体で入念に自己紹介を行うように指導し、早い時期にグループ学習を導入して、常時、相手を変えてロールプレイをさせる必要がある。それが、他のグループの作った会話を聞くという態度の養成にもつながると思われる。

さらに、教員自身が学んだ点も多い。三上にとっては、ルロワイエの授業を見学し、文法クラスで学んだ学習事項が肉づけされる過程を見たのは有益であった。教員同志の話し合いを通じて、部分冠詞などの教え方が日・仏の教材で異なっていることにも気づいた。ルロワイエにとっては、聞き取りと会話のみの試験を実施したことがよい体験になった。

今回は履修システムや教材の関係もあり、明確な役割分担をした上でペア授

業を行ったが、授業内容を固定化すると、相手の領分に踏み込むまいとしてフラストレーションがたまる場合もある。チームワークを高めて緩やかな役割分担にして行くのが理想かもしれない。

2) 教科書に対する評価

『ディアログ』は、自己紹介、買い物をする、好き嫌いを言うといった言行為の学習を、形を変えて繰り返し取り扱っており、こうした表現については、会話のクラスで十分に学ばせることができた。これらの分野では、新出表現もうまく取り入れて進めた。また、CDに、同じ会話がノーマルスピードとよりゆっくりしたスピードで録音されていたのは、学習者の助けになったと考えられる。問題点は、特に後半、会話を現実の会話に近づけようとするあまり、初心者にとっては特殊な単語を数多く用いているところである。後期に教科書を使えなくなったのも、ここに一因がある。

文法の方では、ワークブックだけでは文法事項を説明するのが難しく、しばしば他のプリントを使わざるを得なかった。練習問題が多いのは評価できるが、文法の教科書としては、学生には使いやすくなかったであろう。この点は、特に、外国語を苦手とする学生の理解不足につながったと思われる。先に述べたように、中心となる会話の部分も後期の内容は難しくなりすぎて、あまり教科書を使えなかったのも、会話・文法ともに教材に不満が残る結果となった。使用後の印象としては、この教材は、すでに多少フランス語を勉強したことのある、フランスの日常生活への関心の高い学習者を対象としたときに、最も効果を発揮するタイプのものだと思われた。授業を始める前の教材研究が不十分であったのを反省した次第である。

6. 反省と今後の課題

さて、学生にとっても、教員にとっても、得るところはあったものの、学習者の到達度の観点から見ると、今回のペア授業の成果は不十分であった。反省

点の第一は、先に述べたように教材選択が適切ではなかったことである。ペア授業を成功させるためには、本学の学生の学力にあった、授業の連動性を保って進める総合的な教科書が必要である。今回のペア授業のための話し合いにより、日・仏の教員の間で、目指すべき教材のコンセプトが明らかになり始めた。いずれは、自主教材を製作できるよう議論を深めて行きたいと考えている。

第二に、受講者の側の問題がある。冒頭でも指摘したが、未習言語の選択必修制度のもとで、本学のように学生が自由に履修クラスを選べる場合、同じクラスの中には、モチベーションや習熟度の高い学生もいれば、嫌々ながら、単位のためだけに学習する学生もいる。これはペア授業のような実験クラスでも同様である。今回のクラスで特徴的にあらわれた成績の両極化は、その意味では、日・仏の教員が単独で担当しているクラスでも小規模な形では見られる現象である。それが実験クラスで目立ったのは、ペア授業で学習意欲が高まった学生層と、物珍しさや友達がいるからといった理由から、ネイティブ教員の会話クラスが組み込まれたこのコースを選択し、直接法の授業に拒絶反応を起こした学生層との差が大きく出たためであるように思われる。

また、現在、初級文法クラスで扱っている学習内容は、条件法、接続法などを中級クラスにまわしているとはいえ、相変わらずかなり網羅的なものであり、後期の学習内容をモチベーションや習熟度の低い学生に消化させるのは容易ではない。今回のクラスでは、文法の教科書として不十分な教材を使った分、この傾向がはっきりとあらわれたと考えられる。

このように、ペア授業の結果をとらえ返してみると、多様化する一方の学生に対して、一律の授業形態によって対応しようとすることの無理が見えてくる。上下の幅の大きいクラスで平均的なレベル設定をすると、学習意欲、習熟度の高い学生には退屈な授業となり、学習意欲、習熟度の低い学生には難しすぎて、語学嫌いを助長する授業となる。外国語を苦手とする学生には、学習内容を絞り、ゆっくりした進捗で進む入門コースを準備し、学習意欲の高い学生に対しては、実践的な到達目標の達成をかかげたインテンシブコースを設ける、こうしたきめ細かい対応が必要になっているのを強く感じる。少なくとも、学生の時間割上の選択の自由をせばめても、理系、文系のクラス指定等を復活させ、

受講生のレベルの均質化を図るべきであろう。

学習意欲の高い学生にとっては、ネイティブ教員の授業がよい刺激となっているのは確かである。会話クラスのアンケートには、「フランス語による説明がわからない」という不満も記されているが、「フランス語だけの授業は、より集中できる」、「全部フランス語なので、フランス語の発音に慣れることができた」、「初めはまったくわからなかったが、先生が何度も繰り返し発音してくれてわかるようになったときはうれしかった」といった感想も寄せられている。しかし、すでに述べたように、日本語で学生とコミュニケーションできないネイティブ教員の場合、クラス運営は必ずしも容易ではない。したがって、ネイティブ教員のクラスを学生に有効活用させるためには、学習効率の高いコースデザインと日本人教員の協力が不可欠なのである。

コースデザインについては、本学の現行のシステムでは、会話クラスの担当者は、自分の教えている学生の文法クラスの進捗を知ることができないという問題がある。これは、日本人担当者にとっても決して教えやすい条件ではないが、学生の既習事項を簡単に見抜くことのできないネイティブ教員にとっては、クラス運営上の不安要因となりうる。さらに、個々の学生の文法の進捗が違っているので、新たな言行為を導入する際、ほとんどの場合、文法説明から始めざるをえない。ペア授業でなくとも、文法のクラスが会話のクラスと同じ学習者に対して行われていれば、ネイティブ教員の授業の苦労は減るであろう。文法と講読／会話という区分を続けるなら、時間帯をセットにして開講する方が効果的だと思われる。

以上、ペア授業の反省とそれに関わる本学の未習言語教育のシステムの問題について述べた。個々の授業の改善はもちろん重要であり、われわれも個人的な努力を積み重ねて行きたいと考えている。しかし、大衆化、多様化の進んだ大学において、個々の学生に対する教育効果を真に高めたいと考えるならば、システム全体の改革についても、組織的に取り組むべき時期に来ていると思う。

注

- [1] 本稿は、2001年2月6日に、金沢大学外国語教育研究センターの研究会で両名が行った報告を基にしている。ルロワイエの意見・感想については、フランス語の原稿の形で渡されたものを三上の方で翻訳し、話し合いの上、全体の流れの中に位置づけた。最終的な文責は三上にある。
- [2] 昨年度まで使用された教科書には、*Le Nouveau sans Frontière 1* (Clé international), *Cadences 1* (Hatier/Didier), *Café Crème 1* (Hachette Livre) などがある。
- [3] 本学では、学生は第1回目の授業に出席して履修登録を行う以前に、1学期につき3科目までは、シラバスを読んだ段階で優先受講の申し込みをすることができる。
- [4] 誤解のないようにつけ加えておくが、筆者たちは、工学部の学生の外国語学習に対する適性が全体的に低いと考えているわけではない。フランス語を楽しんで学び、十分な成果を上げる学生もいる。ただし経験的には、工学部の場合、学生間の個人差の幅が大きいように思われる。